

留魂錄  
風塵遺草

全

關西  
百知錄

リ 5  
1599





長門松陰吉田先生著

留魂錄

同 輯取素彦先生著

風簷遺草

全

松下卯塾藏版



留魂錄

身ハタトヒ 武藏ノ野邊ニ朽ヌトモ留置  
大和魂

十月念五日

二十一回猛士

一余去年以來心蹟百變舉テ數ハ難ニ就中趙ノ  
賈高ヲ希ヒ楚ノ屈平ヲ仰ク諸友ノ知ル所ナ  
リ故ニ子速カ送別ノ句ニ燕趙多士一貫高荆  
楚深憂只屈平ト云モ此トニ然ルニ五月十四  
日關東ノ行ヲ聞シヨリハ又一ノ誠ノ字ニ工





夫ヲ付タリ時ニ子遠死字ヲ贈ル余之ヲ用ヒ  
ス一白綿布ヲ求テ孟子至誠而不勤者未之有  
也ノ一句ヲ書シテ巾へ縫付携テ江戸ニ來リ  
是ヲ評定所ニ留メ置シモ吾志ヲ表スルニ去  
年來ノ事恐多クモ 天朝幕府ノ間誠意相  
孚セサル所アリ天苟モ吾區々ノ悃誠ヲ諒シ  
玉ハ、幕吏ハ又吾説是トセント志ヲ立タレ  
正蚊蠱負山ノ喩終ニ事ヲナスコト不能今日  
至ル亦吾徳ノ菲薄ナルニヨレハ金將誰ヲカ

尤メ且怨ニシヤ

一七月九日初テ評定所呼出アリ三奉行出坐尋  
鞠ノ件兩條アリ一曰梅田源次郎長門下向ノ  
節面會レタル由何ノ密議ヲカセシマ二曰御  
所内ニ落文アリ其手跡汝ニ似タリト源次郎  
其外申立ル覺アリヤ此二條ノニ夫梅田ハ素  
ヨリ奸骨ナレハ余其志ヲ語コト欲セサル所  
ナリ何ノ密議ヲカナサンヤ吾性光明正大ナ  
ルコト好ム豈落文ナトノ隠昧ノ事ヲナサン



マ余是ニ於テ六年間幽囚中ノ苦心スル所ヲ  
陳シ終ニ大原公ノ西下ヲ請ヒ鯖江侯ヲ要ス  
ル等ノ了ヲ自首ス鯖江侯ノ事ニ因テ終ニ下  
獄トハナレリ

一吾性激烈怒罵ニ短シ務テ時勢ニ從ヒ人情ニ  
適スルヲ主トス是ヲ以テ吏ニ對シテ幕府違  
勅ノ已ムヲ得サルヲ陳シ然ル後當今的  
當ノ處置ニ及フ其說常ニ講究スル所ニシテ  
具ニ對策ニ載スルカ如シ是ヲ以テ幕吏ト雖甚

怒罵スル了不能直ニ曰汝陳白スル所悉ク的  
當氏思ハレス且卑賤ノ身ニシテ國家ノ大事  
ヲ議スル了不届ナリ余亦深ク抗セズ是ヲ以  
テ罪ヲ得ルハ萬々辞セサル所也ト云テ已ミ  
又幕府ノ三尺布衣國ヲ憂ル了ヲ許サズ其是  
非吾曾テ辨争セサル所ナリ聞ク薩ノ日下部  
伊三次ハ吏ニ對シ當今政治ノ缺失ヲ歷詆シ  
テ如是ニテハ往先三五年ノ死事モ保テ難シ  
ト云テ鞠吏ヲ激怒セシメ乃曰是ヲ以死ヲ得



ト雖悔サルナリト是吾ノ及サル所ナリ子遠ノ死ヲ以テ吾ニ責ルモ亦此意ナルヘシ唐ノ段秀實郭曦ニ於テハ彼カ如ク誠惘朱泚ニ於テハ激烈然ラハ則英雄自ラ時措ノ宜シキアリ要内省不疚ニアリ抑亦人ヲ知り機ヲ見ルコトヲ尊フ吾ノ得失當ニ蓋棺ノ後ヲ待テ議スヘキノミ

一此回ノ口書甚草々ナリ七月九日一通申立夕リ後九月五日十月五日兩度ノ呼出モ差タル

鞠モナクメ十月十六日ニ至リ口書讀聞セアリ直ニ書判セヨトノコト之余カ苦心セシ墨使應接航海雄略等ノ論一モ書載セス唯數ヶ所開港之事ヲ程克演テ國力充實ノ後御打攘可然ナト吾心ニモ非サル迂腐ノ論ヲ書付口書トス余言テ益ナキヲ知故ニ敢テ云ハス不滿ノ甚シキニ甲寅ノ歲航海一條ノ口書ニ比スルトキハ雲泥ノ違ト云ヘシ

一七月九日一通リ大原公ノコト鑄江侯要駕ノコト



等申立タリ初意ラク是等ノ了幕ニモ已ニ謀  
知スヘケレハ明白ニ申立タル方却テ宜シキ  
ト已ニシテ逐一口ヲ開キシニ幕ニテ一圓  
知サルニ似タリ因テ又意ラク幕ニテ知ラヌ  
了ヲ強テ申立テ多人數ニ株連蔓延セハ善類  
ヲ傷フ了少ナカラスモ了吹テ疵ヲ求ムル  
齊シト是ニ於テ鯖江族要撃ノ了モ要諫ト  
云替タリ京師往來諸友ノ姓名連判諸士ノ姓  
名等可成丈ハ隠シテ具白セヌ是吾後起人ノ

為ニスル區々ノ婆心ニ而シテ幕裁果シテ吾  
一人ヲ罰シテ一人モ他ニ連及ナキハ實ニ大  
慶ト云ヘシ同志ノ諸友深考思セヨ  
一要諫一條ニ付事不遂トキハ鯖江族ト刺違テ  
死シ警衛ノ者要蔽スルトキハ切拂ヘキトノ  
了實ニ吾云サル所ナリ然ルニ三奉行強テ書  
載テ誣服セシメント欲ス誣服ハ吾肯テ受ン  
ヤ是ヲ以テ十六日書判ノ席ニ臨テ石谷池田  
ノ兩奉行ト大ニ争辨ス吾肯テ一死ヲ惜マン



ヤ而奉行ノ權詐ニ服セサルニ是ヨリ先九月  
五日十月五日兩度ノ吟味ニ吟味役ニテ具ニ  
申立ルニ死ヲ決シテ要諫スハ必シモ刺違切  
拂等ノ策アルニ非ス吟味役具ニ是ヲ諾シテ  
而モ且口書ニ書載スルハ權詐ニ非ヤ然レ事  
已ニ爰ニ至レハ刺違切拂ノ兩事ヲ受サルハ  
却テ激烈ヲ欠キ同志ノ諸友モ亦惜ムナルヘ  
レ吾ト雖亦惜ムサルニ非ス然レ氏反復思ヘ  
ハ成仁ノ一死區々ノ失ニ非ス今日義卿奸權

ノ為ニ死ス天地神明照鑑上ニアリ何惜ムヘ  
キ一カアラシ

一吾此回初メ素ヨリ生ヲ謀ラス又死ヲ必セス  
唯誠ノ通塞ヲ以天命ノ自然ニ委シタルナリ  
七月九日ニ至リテハ略一死ヲ期ス故ニ其詩  
ニ云繼盛唯當甘市戮倉公寧復望生還其後九  
月五日十月五日吟味ノ寛容尤ニ欺カレ又ハ夕生ヲ  
期ス亦頗ル慶幸ノ心アリ此心吾此身ヲ惜ム  
為ニ發スルニ非ス抑故アリ去臘大晦朝議已



二幕府ニ貸ス今春三月五日我公ノ駕已ニ萩  
府ヲ發ス吾策是ニ於テ尽果タレハ死ヲ求ム  
ル一極テ急ナリ六月ノ末江戸ニ來ルニ及ン  
テ夷人ノ情態ヲ見聞シ七月九日獄ニ來リ天  
下ノ形勢ヲ考察シ神國ノ事猶ナスヘキモノ  
アルヲ悟リ初テ生ヲ幸トスルノ念勃々タリ  
吾若死セスンハ勃々タルモノ決シテ汨沒セ  
サルニ然レ凡十六日ノ口書三奉行ノ權詐吾  
ヲ死地ニ措ントスルヲ知テヨリ更ニ生ヲ幸

ノ心ナシ是亦平生學問ノ得カ然スルニ  
一今日死ヲ決スルノ安心ハ四時循環ニ於テ得  
ル所アリ蓋シ彼ノ禾稼ヲ見ルニ春種ニ夏苗  
ニ秋蒔冬藏ス秋冬至レハ人皆其歲功ノ成ル  
ヲ悦曾テ西成ニ臨テ歲功ノ終ルヲ哀シムモ  
ノヲ聞カス吾行年三十一事成ル一ナク死シ  
テ未稼ノ未秀テズ實ヲサルニ似タレハ惜ム  
ヘキニ似タリ然レ義郷ノ身ヲ以テ云ヘハ是  
亦秀實ノ時ナリ何ソ必シモ哀マン何トナレ



ハ人壽ハ定リナク禾稼ノ必ス四時ヲ經ル如  
キニ非ス十歳ニシテ死ス者八十歳中自ラ四時  
アリ二十八自ラ二十ノ四時アリ三十八自ラ  
三十ノ四時アリ五十百ハ自ラ五十百ノ四時  
アリ十歳ヲ以テ短トスルハ蟪蛄ヲシテ靈椿  
タラシメント欲スルナリ百歳ヲ以テ長トス  
ルハ靈椿ヲシテ蟪蛄タラシメント欲スルナ  
リ齊シク命ニ達セストハ義卿三十四時已備  
亦秀亦實其糝タルト其粟タルト吾カ知所ニ

非ス若同志ノ士其微衷ヲ憐レシ繼紹ノ人ア  
ラハ乃後來ノ種子未タ絶ヘス自ラ禾稼ノ有  
年ニ耻サルナリ同志其是ヲ考思セヨ

一東口揚屋ニ居水戸ノ士堀江克之助余未タ一  
面ナシト雖真ニ知己ナリ真ニ益友ナリ余ニ  
謂テ曰昔シ矢部駿州ハ桑名侯へ御預ノ日ヨ  
リ絶食シテ敵讐ヲ詛テ死シ果シテ敵讐ヲ退  
ケタリ今足下モ自ラ一死ヲ期スルカラハ祈  
念ヲ籠テ内外ノ敵ヲ拂ハレヨ一心ヲ殘シ置



テ玉ハレヨト丁寧ニ告戒セリ吾誠ニ此言ヲ  
感服ス又鮎澤伊太夫ハ水藩ノ士ニレテ堀江  
ト同居ス余ニ告テ曰今足下ノ御沙汰モ未タ  
測ラレス小子ハ海外ニ赴ケハ天下ノ事物テ  
天命ニ附センノ之但シ天下ノ益ト成ヘキ  
ハ同志ニ託シ後輩ニ殘シ置度ナリト此言  
大ニ吾志ヲ得タリ吾ノ祈念ヲ籠ル所ハ同志  
ノ士甲斐々々シク吾志ヲ繼紹シテ尊攘ノ大  
功ヲ建ヨカシナリ吾死スル堀鮎二子ノ如キ

ハ海外ニ在トモ獄中ニ在トモ吾同志タラン  
者願クハ交ヲ結ヘカシ又本所亀沢町ニ山  
口三輔ト云醫者アリ義ヲ好ム人トシヘテ堀  
鮎二子ノ事ナト外間ニ在テ周旋セリ尤モ及  
フヘカラサルハ未タ一面モナキ小林民部ノ  
事ニ子ヨリ申遣ハシタレハ小林ノ為ニモ亦  
大ニ周旋セリ此人想フニ不凡ナラン且三子  
ヘノ通路ハ此三輔老ニ托スヘシ  
一堀江常ニ神道ヲ崇メ天皇ヲ尊ヒ大道ヲ天下



ニ明白ニシ異端邪説ヲ排セント欲ス謂ラク  
天朝ヨリ教書ヲ開版シテ天下ニ領示スルニ  
如スト余謂ラク教書ヲ開版スルニ一策ナカ  
ルヘカラス京師ニ於テ大學校ヲ興シ上  
天朝ノ御學風ヲ天下ニ示シ天下奇材異能ヲ  
京師ニ貢シ然ル後天下古今ノ正論確議ヲ輯  
集メ書トナシ 天朝御教書ノ餘ヲ天下ニ  
分ツトキハ天下ノ人心自ラ一定スヘシト因  
テ平生子遠ト密スル所ノ尊攘堂ノ議ト合セ

堀江ニ謀リ是ヲ子遠ニ任スル丁ニ決ス子遠  
モシ同士ト内外志ヲ協ヘ此事ヲシテ少シク  
端緒アラシメハ吾志トスル所モ亦荒セスト  
云ヘレ去年勅諭論旨等ノ丁一跌スト雖尊皇  
攘夷苟モ已ムヘキニ非レハ又善術ヲ設ケ前  
緒ヲ繼紹セスンハアルヘカラス京師學校ノ  
論亦奇ナラスヤ

一小林民部云京師ノ學習院ハ定日アリテ百姓  
町人ニ至ルマテ出席ニテ講釈ヲ聽聞スル丁



ヲ許サル講日ニハ公卿方出座ニテ講師菅家  
清家及ヒ地下ノ儒者相混スルナリ然ラハ此  
基ニ因テ更ニ斟酌ヲ加ヘハ幾等モ妙策アル  
ヘシ又懷徳堂ニハ靈元上皇宸筆勅額アリ此  
基ニ因リ更ニ一堂ヲ興スモ亦妙ナリト小林  
云ヘリ小林ハ鷹司家ノ諸大夫ニテ此度遠島  
ノ罪科ニ處セラル京師諸人中罪責極テ重シ  
其人多材多藝唯文字ニ深カラスオアル人ト  
見ユ西奥揚屋ニテ同居後東口ニ移ル京師ニ

テ吉田ノ鈴鹿石州同筑州別テ知己ノ由亦山  
口三輔モ小林ノ為ニ大ニ周旋シタレハ鈴鹿  
山口カ手ヲ以テ海外迄モ吾同志ノ士通信ヲ  
ナスヘシ京師ノ事ニ就テハ後來必カヲ得ル  
所アラシ

一讚ノ高松ノ藩士長谷川宗右衛門年來主君ヲ  
諫メ宗藩水家ト親睦ノ丁ニ付テ苦心セシ人  
ナリ東奥揚屋ニアリ其子速水余ト西奥ニ同  
居ス其父子ノ罪科何未タ知ヘカラス同志ノ



真然

諸友切ニ記念セヨ予始テ長谷川翁ヲ一見セ  
シ時獄吏左右ニ林立ス法隻語ヲ交ユルヲ  
得ス翁獨語スル者ノ如クシテ曰寧為玉碎勿  
為瓦全ト吾甚其意ニ感ス同志其之ヲ察セヨ  
一右數條余緩ニ書スルニ非ス天下ノ事ヲ成ス  
ハ天下有志ノ士ト志ヲ通スルニ非シハ得ス  
而シテ右數人余此回斯ニ得ル所ノ人ナルヲ  
以テ之ヲ同志ニ告示スニ又勝野ノ父豊作今  
潜伏スト雖有志ノ士ト聞ケリ他日事平ラク

ルトヲ待テ物色スヘシ今日ノト同志ノ諸七  
戰敗ノ餘傷殘ノ同士ヲ問訊スル如クスヘシ  
一敗乃挫折スル豈勇士ノ事ナランヤ切囑々

一越前ノ橋本左内二十六歳ニシテ誅セラル實  
ニ十月十七日也左内東奥ニ坐スル五六日ノ  
之勝保氏ト同居セリ後勝保西奥ニ來リ予ト  
同居ス余勝保ノ談ヲ聞テ益左内ト半面ナキ  
ヲ嘆ス左内幽囚居中資治通鑑ヲ讀ニ注ヲ作



リ漢紀ヲ終ル又獄中教學工作等ノ了ヲ論セ  
レ由勝保予カ為ニ語ルニ大ニ吾意ヲ得クリ  
予益左内ヲ起シテ一議ヲ發セン了ヲ思フ嗟  
夫

一清狂ノ護國論及ヒ吟稿口羽氏ノ詩文稿天下  
有志ノ士ニ寄示シタレ故ニ余是ヲ水人鮎沢  
伊太夫ニ贈ル了ヲ許ス同士其吾ニ代リテ此  
言ヲ踐ハ幸甚也



カキツケ終テ後

心アルコトノ種々カキ置ヌ思ヒ残セルナカ  
リケリ

呼タシノ聲マツ外ニ今ノ世ニ待ヘキ丁ノ無リ  
ケルカナ

討レタル吾ヲアハレト見シ人ハ君ヲ崇メテ夷  
拂ヘヨ

愚ナル吾ヲモ友トメツ人ハワガ友トメテヨ  
人

七夕ヒモ生カヘリツ、夷等ヲ拂ハンコ、口吾  
忘レノヤ

十月廿六日黄昏書

二十一回猛士



平生之學問淺薄ニシテ至誠天地ヲ感格スル丁  
出來不申非常ノ變ニ立至リ申候嚙々御愁傷モ  
可被遊拜察仕候

親思フ心ニマサル親心今日ノ音ツレ何トキ  
クラシ

乍去去年十一月六日差上候書得ト御覽被遊候  
ハ、左近御愁傷ニモ及不申ト奉存候尚又當五  
月出立之節心事一々申上置候事ニ付今更何モ

思殘候事無御座候此度漢文ニテ相認候語諸友  
書モ御轉覽可被遊幕府正議ハ丸ニ御取用無之  
夷狄ハ縱横自在ニ御府内ヲ致跋扈候一共  
神國未地ニ墜不申上ニ

聖天子アリ下ニ忠魂義魄充々致候ハ天下之  
事モ餘リ御力御落無之様奉願候随分御氣分御  
大切ニ被遊御長壽ヲ御保可被成候以上

十月廿日認置

家大人膝下



王大人膝下

家大兄坐下

寅次郎百拜

兩北堂様随分御気体御厭專一ニ奉存候私被誅  
候共首ニテモ葬具候人アリハ未天下之人ニハ  
棄ラレ不申卜御一咲奉願候児五小田村久坂之  
三妹ハ五月中置候事忘レ又様御申聞奉願候吳  
吳千人ヲ哀ニヨリハ自ラ勤ムル丁肝要ニ御座  
候○私首ハ江戸ニ葬吳家祭ニハ私平生用候硯  
卜去年十一月六日呈上仕候書卜ヲ神主卜被成  
候様奉願候硯ハ己酉ノ七月カ赤馬關廻浦之節  
買得セシ也十年餘著速ヲ助タル功臣也



松陰二十一回猛士卜々御記奉頼候

上封

小田村伊之助様

久保 清太郎様

久坂 玄瑞様

二十一回生

風箏遺草叙

自國家勤王之車興。藩士之舍生殉義者。不知其幾何焉。蓋雖出於名節之盛。未嘗不由。吾公精忠之孚於上下也。夫十一士之死。寃與否。姑置之。其臨刑從容不迫。談笑而受刀者。雖古烈丈夫。何以尚之。獄卒之無狀。語及之。則淚下矣。而奸吏俗子。或不察之。謬為之說曰。臨死有失節者焉。嗚呼。不成人之美。可謂以甚矣。余下獄。問同囚得以觀其絕命之詩歌。尤想見其從容就死之狀也。然獄中之事。嚴禁漏洩。余



恐十一士之名湮滅於無聞故整理之附以小傳以藏篋底云乙丑正月十九日某撰

自國事廢王人無所歸止之矣夫既海濱不...

國分思ひ居るあゝとてふはけは終に終端とあり  
~~~~~あゝ終あゝとてふはけは終とあり  
~~~~~あゝとて

完戸真徵

我あゝぬ人乃志ゆりてとてふはけは終とあり  
故甲とて出さるる

執るふもあれあふあゝとてふはけは終とあり  
我とて親く思ひ嘆ん子休るふとて

あゝあゝとて思ひふとて終るふの故ありあゝとて



完戶真徵。稱九郎兵衛。後改左馬介。為人簡默。頗有長者之風。涉獵國史。精於藩籍。所著有御軍記。記藩祖之軍功歷京師及大坂留守。居轉用談役。京師之變。在坂邸。以諸隊差節度。下獄而死。時年六十一。

絕命辭

中村清旭

皇道在攘夷。守之死不辭。

中村清旭。稱九郎。簡元負氣。重神道。思夷狄。歷兩府祐筆役。轉政事堂內用掛京師之變。副國司信

濃。在天龍寺。以部下暴動。下獄而死。時年三十七。

辭世

佐久間義濟

今はくや云乃系子も世の象と消甲くあありふりてふ

佐久間利濟。稱佐兵衛。本姓中村氏。幼養於赤川氏。後冒佐久間氏。弱冠游水戶。入會澤氏之門。為人快利。畧通和漢。自代官。轉藏元役。後為使番。副福原越後。在伏見。坐京師之變。與兄九郎偕下獄而死。時年三十二。

辭世

竹内勝愛



本史乃... 治甲... 枯井... 或... 嘆も... 著も... と... と... 移の... 如

絶命辞

天地正氣。有人而存。

竹内勝愛。稱正兵衛。為人沈毅忠壯。有武人之風。歷代官及藏元役。京師之變。以内用。在大坂邸。與完戸中村諸人同心戮力。周施至矣。死時年四十二。以上四名。以甲子十一月十二日。就死。

辞世

毛利 某

皇の... 代とわ... 我身... 苦... 不... じ... も... 持... 少... 女... 武士... 乃... た... 不... 入... 其... 妹... 一... 一... 一...

毛利某。稱登人。為人重厚。歷小姓役。遷世子番頭。進為直目附。藩制直目附之職。非家督人。則不得任焉。而以嫡子任之者。以登人為始。蓋以其撰別無人也。平日無他嗜好。愛書画。與人接。無鱗甲。死時年四十二。

辞世

大和真利



國の〜を乃お何々お志う〜ん君ふさ〜る大お〜るを  
大和真利。稱國之助。初擢江戸留守居。既而慨然  
辭職。從事於航海。惡夷狄之害。欲火橫濱夷館。事  
發覺而已矣。後遷世子番頭。轉直目附。死時年三  
十。

臨刑而賦。似後之君子。

前田利濟

一死如鉛。豈敢辭。居官半世。值清時。酬君心事。何須  
辨。只有青天白日知。

前田利濟。字致遠。號陸山。稱孫右衛門。夔才容衆。  
尤老於吏事。戊午之秋。吉田寅次以幕譴。下獄。政  
府諸人以嫌疑為懼。而利濟獨為寅次周施。大勉  
矣。歷兩府手元。轉直目附。最後為加判相談役。死  
時年四十七。

辭世

渡邊 暢

人間行路盡風波。一死報君豈有他。莠吏不知賈生  
志。流涕奈此國家何。



渡邊暢稱內藏太。為小姓役。橫濱燒館之舉。內藏太亦與焉。轉政務座。屢事明快。有老吏之風。死時年二十九。

辭世

猶崎清義

日出之邦事義方。不飢不凍送星霜。今宵一死酬明聖。二十八年更覺長。

猶崎清義稱弥八郎。號節庵。學術純正。單心於義理。游江戸。入大橋順藏之門。尊讓之義。有大所發明。擢政務座。死時年二十八。

辭世

山田憲之

山田憲之稱亦介。號愛山。初為小姓役。後補密用局祐筆。性質明敏。博綜衆技。精於兵學。為手當方頭人。死時年五十六。

又

松島久誠

松島久誠字有文。號韓峯。稱剛藏。初業醫。修洋學。



尤精於航海術。癸亥馬關之戰。剛藏為船將。以功  
列於騎隊。主管海軍局。為人疎放。不復事繩墨。死  
時年四十。

以上七名。以甲子十二月十九日就死。

附今樣 緒忠魂のむね 完戶真徵

今の世とていふも子年不終る 吾も名をいほむ事  
う努る 俗奸吏忠魂となりてかゝる世

元治紀元甲子十二月廿九日撰於野山獄南房  
第二舎時屬窮陰天日慘澹覺悲風起筆端也

# 剛藏

手紙に事本多ふる事あり  
行方あり

剛藏





身如木末三月餘也

金幣抄卷末法部

海樓子海法

雜記